当院における咽後膿瘍症例の検討

須藤　敏[1)]　梅木　寛[1)]　崎浜教之[1)]　與座朝義[2)]

1）沖縄県立中部病院　耳鼻咽喉・頭頸部外科

2）よざ耳鼻咽喉科

【はじめに】咽後膿瘍は，咽頭後間隙に膿汁が貯留する状態であり，多くは乳幼児に発症するといわれている．その原因として，内側咽頭後リンパ節が感染し膿瘍を形成することや，異物による咽頭後壁の粘膜損傷などが挙げられている．重症化すると気道狭窄や縦隔膿瘍を引き起こすため，耳鼻咽喉科感染症のなかでも重篤なものの一つであり，早急な診断と治療が要求される．しかし，私達が遭遇する頻度は比較的稀である．今回私達は，沖縄県立中部病院における咽後膿瘍症例について臨床的検討を行ったので報告する．

【対　　象】1986 年より 2011 年までに沖縄県立中部病院にて入院加療を行った咽後膿瘍症例 35 例（男性 22 例，女性 13 例，年齢：４ヶ月～ 83 歳）を対象とした．

【結　　果】年齢別分布では０歳：２例，１～９歳：７例，10 代：３例，20 代：１例，30 代：２例，40 代：８例，50 代：７例，60 代：３例，80 代：２例であった．10 歳未満，40 代，50 代に多い結果であった．

病因として，異物が原因であったものが 11 例で，魚骨異物７例，チキンの骨１例，画鋲１例などであった．次いで，上気道感染 10 例，急性扁桃炎６例であった．

治療内容では抗菌薬静注による保存的治療のみで軽快したものが 19 例であった．

一方，外科的処置，すなわち切開排膿術を行ったものは 16 例で，経口法による切開術を 10 例，外切開による排膿術を３例，経口法および外切開を施行したものが３例であった．

膿培養は 19 例中 12 例検出された．内訳は好気性菌が 21 株，嫌気性菌が 11 株であり，Streptococcus 属が 20 株で最多であった．血液培養は 17 例中３例検出され，Staphylococcus aureus，Streptococcus mitis，Bacteroides spp であった．これらはいずれも降下性壊死性縦隔洞炎を合併していた．

気道確保についてみると，咽頭，喉頭の浮腫による高度な気道狭窄のため，直ちに局所麻酔下に気管切開術を施行した症例は４例であった．

重篤な合併症として，降下性壊死性縦隔洞炎を４例に，また，敗血症を３例に認めた．既往歴として，糖尿病を５例，高血圧を３例，アルコール依存症を２例に認めた．

【ま　と　め】当院における咽後膿瘍症例を臨床的に検討した．

起因菌としては Streptococcus 属が最多であった．

重篤な合併症として降下性壊死性縦隔洞炎を４例に認めたが，これらも含めて全例後遺症なく退院できた．